

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

第16回 偉大な大祭司・神の子イエス②

ただ一回の永遠の贖い

第9章①節から②②節 地上の聖所と天の聖所

- ①さて、最初の契約にも、礼拝の規定と地上の聖所とがありました。
- ②すなわち、第一の幕屋が設けられ、その中には燭台、机、そして供え物のパンが置かれていました。この幕屋が聖所と呼ばれるものです。
- ③また、第二の垂れ幕の後ろには、至聖所と呼ばれる幕屋がありました。
- ④そこには金の香壇と、すっかり金で覆われた契約の箱とがあって、この中には、マンナの入っている金の壺、芽を出したアロンの杖、契約の石板があり、
- ⑤また、箱の上では、栄光の姿のケルビムが償いの座を覆っていました。こういうことについては、今はいちいち語ることはできません。
- ⑥以上のものがこのように設けられると、祭司たちは礼拝を行うために、いつも第一の幕屋に入ります。
- ⑦しかし、第二の幕屋には年に一度、大祭司だけが入りますが、自分自身のためと民の過失のために献げる血を、必ず携えて行きます。
- ⑧このことによって聖霊は、第一の幕屋がなお存続しているかぎり、聖所への道はまだ開かれていないことを示しておられます。
- ⑨この幕屋とは、今という時の比喩です。すなわち、供え物といけにえが献げられても、礼拝をする者の良心を完全なものにすることができないのです。
- ⑩これらは、ただ食べ物や飲み物や種々の洗い清めに関するもので、改革の時まで課せられている肉の規定にすぎません。
- ⑪けれども、キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、
- ⑫雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。
- ⑬なぜなら、もし、雄山羊と雄牛の血、また雌牛の灰が、汚れた者たちに振りかけられて、彼らを聖なる者とし、その身を清めるならば、

⑭まして、永遠の“霊”によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、私たちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。

⑮こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者なのです。

それは、最初の契約の下で犯された罪の贖いとして、キリストが死んでくださったので、召された者たちが、既に約束されている永遠の財産を受け継ぐためにほかなりません。

⑯遺言の場合には、遺言者が死んだという証明が必要です。

⑰遺言は人が死んで初めて有効になるのであって、遺言者が生きている間は効力がありません。

⑱だから、最初の契約もまた、血が流されずに成立したのではありません。

⑲というのは、モーセが律法に従ってすべての掟を民全体に告げたとき、水や緋色の羊毛やヒソプと共に若い雄牛と雄山羊の血を取って、契約の書自体と民全体とに振りかけ、

⑳「これは、神があなたがたに対して定められた契約の血である」と言ったからです。

㉑また彼は、幕屋と礼拝のために用いるあらゆる器具にも同様に血を振りかけました。

㉒こうして、ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められており、血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです。（第9章①節から㉒節）

今日の学びの中心的な事柄は「贖い」の問題です。

丁度、教会暦では今週の木曜日、8日がイエスの昇天日でした。その日から10日後、弟子たちは聖霊降臨をお受けすることになるのですが、その丁度復活節の最後にこの学びを進めていくのだなと思いながら、今日はそのおさらいも含めて、親しくその御言葉について耳を傾けたいと思います。

この9章の①節から⑤節までは、古い律法というか、古い幕屋について触れています。

その論点は「礼拝をすることは神にお仕えすることなのだ」ということです。

それでは「神にお仕えするために何をしたら良いか」と言えば、第一に「神の言葉をそのまま実行することが不可欠な要素であり、神がお命じになったことに対して正しく応答する、その御言葉通りに行動すること」によってイスラエルは神の民である保障をいただいて来たわけです。「その一つの証しが『幕屋』である」という捉え方をしています。

この荒野に建てられた幕屋については、出エジプト記の25～31章と35～40章まで詳細に書かれています。その中で、少なくともこの幕屋については次のように説明されています。

（幕屋について）

第①節、

さて、最初の契約にも、礼拝の規定と地上の聖所とがありました。

神とイスラエルとの間に立てられた最初の契約は何であったかという、一つは、礼拝

をすること、そしてもう一つは、聖所が神によって与えられ、調べられることであったと言っています。

第②節

すなわち、第一の幕屋が設けられ、その中には燭台、机、そして供え物のパンが置かれていました。この幕屋が聖所と呼ばれるものです。

かように、聖所について少しく説明をしています。

著者が旧約のこの事柄について簡単にですが触れている理由は、神の御前における礼拝には、天の聖所の雛形としての聖所が与えられているのだから、私たちはそのことに先ず心を向けようではないか、しかもそれは地上に立てられ、一時的にこの世に属するなものであったが、やがては永遠の幕屋（イエス・キリスト）を私たちはお受けすることになるということに結びつけていこうとしているのです。（机上の供物のパンは、即ち、天から降られた「いのちのパン」なるイエス・キリストの象徴でもあります。）

これまでも著者は、旧約におけるイスラエルの人々と神との関係と、イエス・キリストによってもたらされた神のメッセージとを対比しながら、古いものは滅び去るものであり、キリストによって新しく与えられたものは永遠のものであることを何度も語っていますが、ここでも幕屋について同じことを語っているわけです。

神の御言葉に従ってイスラエルが造った幕屋は、あくまで彼らが手で造った幕屋であって、それは神の御言葉に忠実に応えるという彼らの信仰の姿勢を表現するものであった。そしてその姿勢が示されたがゆえに、神はそこで彼らと出会われたのです。しかしそれには限界があり、限定された条件下でしか神と民とが出会えなかったということに触れていこうとしています。

「幕屋の構造」は先ず「第一の幕屋」があ理、その中には燭台が置かれ、机が置かれて、供え物のパンが置かれていました。少なくとも幕屋に入っていくと先ず、そこに青銅で造られた祭壇が置かれていて、その祭壇は動物の犠牲などを神に献げるために用意されたものでありました。

その犠牲は勿論完全なものではなく、不完全なものでしたが、私たちの血の代わりに神の御前に雛形として献げるものであったわけですから、その意味で青銅の祭壇はどうしても必要でした。そこに動物を持って来て神にお献げし「罪を赦してください、贖ってください」と願い出ました。これは、まだ第一の幕屋であって、神の前に直接進み出る状態ではなく、「間接的に神の御前に自分たちが膝をかがめて額ずいている姿」でした。丁度「モーセが、顔覆いをかけて神と出会っているのと同じ状態でした」。

そういう状態の中で青銅の祭壇が置かれ、その奥には洗い桶、洗盤と呼ばれるものが置かれていた。これはこの幕屋の中で奉仕し、あるいは幕屋で仕えてゆく人々、レビとか

祭司であるとかという人々が自らの身体を清めると同時に手を清めるために用いられましたが、それはあくまでもこの地上の水でした」

それに、対比して考えますと、清めをするためには、完全な清めを行なうことができるキリストの御血が既に用意されている、その御血によって清められている、だから、もはや洗い桶のようなものは必要ないという考え方がこの著者の心中にはあったのです。¹²⁷

それからここに書いてあります「燭台」、これは、真ん中の軸の左と右に三本ずつ角が出ている七本の蠟燭が立つ燭台(メノラー)で、聖所に入るとすぐ左側に置かれていたと言われていています。

この燭台には混じりけのない純粋なオリーブ油が入っていて、それが絶えず燈されていたと言われています。その燈火を消すことなく、燃え続けさせることが祭司たちの責任であり職務でした。従って、オリーブ油を絶えず注ぎ続けることが求められていたのです。オリーブの実がよく実らなかったとか、豊かに実ったとかいう言葉で旧約聖書ではイスラエルの人々への祝福を神が主導なさったことを表していますが、オリーブの実が実らないことは、この幕屋で焚く燭台に注ぐ油に事欠く危険に通じます。そうなると、幕屋における燭台の火が強く赤く燃えないで細々と燃え続けることしかできなくなる。これは、信仰の状態を現すと捉えられると思います。そうした信仰における象徴的な意味を持っていたのでオリーブ油の補給は当時は実に大事な仕事だったわけです。

今では食べる、体につける、色々な用途がありますが、当時は神の御前に燈す燈火のために使われた油だったのです。

今にも消え果ててしまうようなオリーブ油ではなく、御霊の火が絶えず燃え続けていてくださるから、今や、私たちは「聖霊のお働きに祈りを捧げるべきだ」ということが言えると思います」。

その次の「一つの机が置いてあり、その上に供え物のパンが置かれていた。」というのは、燭台の右側に設けられていたと考えられています。その机上には安息日ごとに最上の小麦粉で作ったパンが供えられた。それは、出エジプトに困んだ種を入れないパンで、且つ、イスラエルの部族を代表する意味で12個のパンが用意され、その12個のパンが安息日ごとに主の御前に新しく供えられた。

どのように供えられたかは色々な説があるのですが、6個並べてその上に更に6個乗せて12個にしたのだという説もあるし、前と後ろに6個ずつ並べて、12個にしたという説もあるのですが、見てきた人は誰もいないのでどれが本当かわかりません。いずれにせよ、12部族を代表するような意味で一つずつ主のためにパンが供えられた。そういうパンを供える机が置かれていたということです。

第③節、

また、第二の垂れ幕の後ろには至聖所と呼ばれる幕屋がありました。

幕屋が聖所と呼ばれていたとありますが、実際に旧約聖書を読んで参りますと、「その聖所の一番奥、至聖所との境目の垂れ幕の前に『香を焚く台』が置かれていた」ことになるわけです。そして、ここでは「香を焚く台は至聖所の中にあります」となっていますが、どうしてそんな違いが出たかと言うと、色々な資料があって、その資料によって混乱が起こったのかもしれないと思われます。むしろ私は、ここでは常に一つの形ではなく、神の御前に贖いをする日、当時のイスラエルの大贖罪日と言われる贖いの日には、祭司は贖いの業を行うため、この香炉を至聖所の中に持って入ったと考えられ、そして香を焚いたわけですから、そういう状態で今は、至聖所の中に香炉があると考えていただいてもよいと思います。

ですから、ここで述べているのは、通常の状態における聖所の問題ではなく、特別な大贖罪日における聖所の問題を取り扱っていると考えていただくと、贖罪の問題と結びついていく深い動機になるのではないかと思います。

整理しますと、第一の幕屋の後ろにもう一つ幕屋があり、それが「至聖所と呼ばれた第二の幕屋」でありました。第一の幕屋と第二の幕屋の間には現世と隔ての垂れ幕があり、その垂れ幕の後ろには神が権限されると言われる至聖所なる幕屋があったということです。

第④節、⑤節前半

- ④そこには金の香壇と、すっかり金で覆われた契約の箱とがあって、この中には、マンナの入っている金の壺、芽を出したアロンの杖、契約の石板があり、
- ⑤また、箱の上では、栄光の姿のケルビムが償いの座を覆っていました。

至聖所の中に何があったかと言うと、先ずその中心にあったものは「契約の箱」と呼ばれるものです。その箱の中にマンナ、（これはユダヤ人たちが出エジプトの旅の時に神によって与えられた霊的な上からの食べものを意味するもの）が入れられている金の小さな壺が一つありました。

それから神からの権威、神の言葉の権威を示すために主がアロンに与えた杖が入っていました。それは切り取られた枝であったのに、神の力がその中にこもっていたために芽を吹き出したと記されています。「神の命が宿っている杖」と考えられるものです。

（民数記17章23節「アロンの杖が芽を吹き、つぼみをつけ、アーモンドの実を結んでいた」）

つまり、ここには「神の言葉と神によって養われる霊的な糧」が入っているわけですから、私たちが心身共に神によって支えられ導かれていくために必要な神のプレゼントとして実『十戒』の石板、がそこには入っていました。

「十戒」というのは「私たちが生きていくために必要なマンナであり、神の力であり、私たちを生かす神の言葉なのだ」という意味を込めながら、この旧約時代に置かれていた掟の箱の内容をこの手紙の著者は説明している、と捉えられると思います。

(ソロモンの建てた神殿の契約の箱の中には「石の板二枚のほか何もなかった」と記されています。列王記上8章9節

この掟の箱の上に蓋がかぶせられ、その蓋は全部金で覆われていました。その掟の箱の蓋を、ここでは「償いの座」と呼んでいます。そしてその償いの座を至聖所に作られた「一对のケルビム」が翼をひろげて覆っていた。それが至聖所だったのです。ですから「至聖所の中には、色々なものがあるわけではなく、掟の箱があってケルビムが一对そこに造られていた」ことになります。

第⑤節後半、

「こういうことについては、今いちいち語ることはできません」と書かれています。

基本的には、神と出会う場所、神と交わる場所、それが幕屋なのだ。しかし私たちは罪を冒してしまったために直接神と交わることができない。だから限られた人が限られた時だけ神と交わることができ、後は間接的に神をしのび、神にあやまり、神に犠牲を献げ、神に仕えることが繰り返されているに過ぎない。しかも直接神のことに関われるのは、罪に染んだ人々ではなく祭司と呼ばれた人々に限られ、またそれを助けるレビ人に限られたことがここでは言われています。¹³²

このように「神との間には直接関係することができないような隔りがある」とここでは先ず語っています。その理由は、「御子イエス・キリストによって神の救いが完成しているにもかかわらず、その救いを本気になって受け止めていない、あるいは、私たちが今尚、人間の罪祭によって救いを実証したいと考えているからだと言うのです。あなたがたがどんなに一生懸命神と交わりたいと願っても自分たちにできるのはここまでが限界なのだ」ということを、旧約の律法を通してこの手紙の著者は語っているのです。

あなたがたは幕屋の外庭にしか居られないのです。幕屋の中に入れるのは、その中でも特に選ばれた人でだけで、彼らもそのままでは穢れているから、自分が罪祭をなす度、自分の手を洗盤で洗い、自分の身を清めない限りは仕えることができない。それでも、直接神と関わることはできるのではないと言っています。

神は特別な憐れみをもって1年に1回、時を定めて大贖罪日に「大祭司」をお立てになって、その業をさせてくださり、神と出会うさせてくださるけれども、その時以外は直接あなたがたは神と出会えないのです、という言い方をしています。

これは当時の律法主義に立っているユダヤ人に対しても、相当きつい攻撃になります。

神の民だとか何だとか言たって、あなたがたは清くないではないか、ということを徹底的に追求するわけです。至聖所に入れるのは大祭司だけではないか、しかもその大祭司だって自分が清くないから自分の身を清めることをしなければならないではないか、と後の方でたたみかけるわけです。

そのように、「あなたがたは穢れた存在でしかないのだ」と告げるために、この幕屋の問題を取り上げながら語り始めます。それは、「この聖所が地上の聖所であり、人間の手によって造られた聖所だから、不完全なものだ」と述べるわけです。

次に第⑥節から⑩節では、今度は「祭司たちが何をしたのか」について書かれているわけです。即ち、神が設定された場所で一体何が行われていたのかを語るわけです。

第⑥節

⑥以上のものがこのように設けられると、祭司たちは礼拝を行うために、いつも第一の幕屋に入ります。

祭司たちは朝な夕な聖所に入って香を焚き、安息日ごとに新しい種なしパンを12個供え、そして、7本の枝のある燭台の燈火を消すことなく燃え続けさせる責任を委ねられていました。片時も神の前に民の心が向けられないことがあってはならないという意味で、燈火の火を絶やさないように燃やし続ける。週に一度神の安息の日を覚えるために献げるパンを取り替える。その他に緊急に病人が出て癒しが求められた場合、あるいは罪を冒した人間が贖いを求めた場合、あるいは出産をした女性の汚れの時間が過ぎた場合、祭司たちは献げられた青銅の祭壇の上で神の御前に犠牲を献げ、その罪の贖い、罪祭を行ったということになるわけです。それはあくまで第一の幕屋で行われたことであって第二の幕屋では行なわれなかったのです。

第⑦節、

⑦しかし、第二の幕屋には年に一度、大祭司だけが入りますが、自分自身のためと民の過失のために献げる血を、必ず携えて行きます。

この大祭司が「大贖罪日」と呼ばれている日、即ちユダヤの第7の月の10日、一般的にチリスの月の10日と呼んでいます。今の私たちの暦で言いますと9月から10月にかけての頃だと思いますが、その頃に大贖罪日というのがあって、その日一日だけ、しかもただ一度大祭司はこの至聖所に入ることが許されます。

しかも、この至聖所に入る大祭司は一度の入所だけでは駄目なのです。それは決められておまして、先ず最初に至聖所に入る時には外に置いておきました香炉を持って入る。そして「主の前に香を焚いて出て来る」のです。その次には、「牛の血を持って入る。それは自分自身とその家族を清めるため」にその血をふりかけて願いをする。もう一度出て来て、今度は山羊の血を持って中に入る、それは民のために、民の願いのためにそれを『償いの座』に振りかけて民の罪を贖う。その三つの行為を完全にきちんと順序良く繰り返さない限り、贖罪は成立しない。ですから計3度大祭司は大贖罪日に聖所から至聖所へと出入りすることが義務づけられているのです」

結局「大贖罪日はどういう意味でもたれたか」というと、すべてのイスラエルの人々の罪と穢れが清められ、イスラエルの人々の神との関係が途切れずに継続してゆく保障がこの

大祭司の大贖罪日の贖いの業によって継続されていったのだということになるのです。

ですから、大祭司はそれができなければもうどうしようもない、イスラエルは駄目になってしまう。神殿がなくなっても同じことが言われたわけで、神殿が破壊された時、イスラエルの人たちが「もうおしまいだ」と感じたのは実はその贖罪の業ができなくなってしまった。神との関係は断絶してしまった、という哀しみをもって嘆きの歌を歌ったのだということになるのだと思います。（嘆きの壁の意味が分かりました）

このことは大祭司が中に入って行き、その血を振りかけてくれることによって自分たちは癒され、罪赦されるのだと彼らは真面目に本気で信じていた。言い換えると「自分たちの罪は家畜の血によって贖い得るのだという確信をもってしまっていた」のです。

ところがイエスは「あなたがたの罪は深く、どうしようもなく、家畜の血なんかでは贖えるレベルではない」と語られるのです。冒した罪を贖うためには自分自身が血を流して清める以外に道はない、いくら無傷の家畜の血を流して清めても、清められる望みは全くない、「だから、わたしは十字架の上であなたがたのために血を流したのだ」という究極の御業が成されたのです。

罪なき神の子が十字架の上で死んでくださったことを、私たちは色々な場面でよく用いますが、罪なき神の子が十字架の上で御血を流してくださることがなぜ必要かと言うと、その御血が注がれない限り、私たちは清められない、神との関係を回復できない、そういうどうにもならないほどの罪の状態に私たちが置かれているからこそ、イエスは血を流してくださったのです。

更にイエスの十字架の出来事の中では「唯一度」という言葉が何回も出て来ます。ですから香炉を持って入り、自分を清めるために牡牛の血をもって入り、そして民衆の罪を清めるために雄山羊の血を持って入るという「3度の行為をイエスはなさらなかった」

なぜなら「香を焚く必要はない、イエス・キリストの功しは、もはや香よりも強く神の御前に芳しい供え物として献げられていた」のです。そして「イエスは御自分が罪をもっていらっしゃらないから、御自分を清めるための血も必要とされなかった」「イエスがなされなければならなかった一番大事なことは、民衆の罪を贖うということのために御血を注ぐことであった」それはご自分が罪の代価としての御血を降り注ぐことによってすべての人たちに贖いが及ぶためだったのです。

第⑧節、

⑧このことによって聖霊は、第一の幕屋がなお存続しているかぎり、聖所への道はまだ開かれていないことを示しておられます。

別な言い方をすれば「聖所と至聖所との間の『垂れ幕』がある限り、外側と中側とがあ

ったわけですから、私たちは至聖所には近づけないので、神の御前に進み出られない」。そういう状態であることを私たちに知らせています。この第二の幕屋即ち至聖所に直接入るためには、清めると同時に<隔ての垂れ幕>が取り除かれなければなりません。

「イエスが十字架の上で息を引き取られた時、神殿の垂れ幕が真っ二つに裂かれてしまった。もはや垂れ幕の役目を果たさなくなった。聖所と至聖所とを隔てる垂れ幕は取り去られてしまった」。つまり「イエスの十字架の贖いなしには、まだ神の御前に出られず聖所への道はまだ開かれていなかった」と、ここでは告げているのです。

第⑨節、

この幕屋とは、今という時の比喻です。すなわち、供え物といけにえが献げられても、礼拝をする者の良心を完全なものにすることができないのです。

言い換えると、第一の幕屋は正にそういう意味では、地上の幕屋を意味しているのであって、そこで一生懸命礼拝しても色々な犠牲を献げてもあなたの罪はそれを越えて深く大きなものだから、そんなことでは神の御前に完全な自由を得ることはできないのです。

もう少し具体的に言えば、あなたがたの頑な心が完全に打ち砕かれ、罪の根が上よりの火によって完全に焼き尽くされない限り「本当の礼拝」はできないのだと言っています。

「宗教」が私たちの国でも色々な形で最近話題になって来ています。オウム真理教の問題が終わって一息ついた状態にありますが、今度は金儲けのための宗教が問題になっている。宗教とは一体何なのかという問題が問われています。（今、正に日本は統一教会問題に直面しています。1997年5月のお話ですが今日の日本に的中していること不思議に思います。）

どんなに一生懸命修行しても、どんなに素晴らしい論理を展開しても、それが神の御前における人々を自由にしたり、人々の良心を清めたりできないことを知っておかなければいけないと思います。

使徒言行録の中に「教会以外には救いはない」という言葉があります。これは、キリスト御自身の介在なしには神の御前には自由に立てないことを意味しているのです。

ですから「日曜礼拝に集わしめられること、それは正に、イエスの大きな贖いと憐れみとのゆえにゆるされている神からの最高のギフトだと頭を垂れずにはおかれません。」ところが多くの場合、礼拝に出たから何かご褒美が貰えるのではないかとさえ考える。こんなに熱心に信仰を持っているのだから少しはいいことがあってもいいはずだと思うのです。それは、あくまで自分たちの手作りの礼拝をしているのだから、その手作りの報いがあったとしてもいいのではないかと主張していることなのです。

しかし、礼拝とは、神が私たちにゆるしてくださった神との出会いの時なのです。ですから人間の手造りでは絶対にはないのです。神によって用意されない限り、礼拝はない。神の

用意してくださったものに対して畏れとおののきとをもって近づき、神の憐れみによって支えられ仕えること、それが礼拝なのだということだと自覚すれば、そのために私たちは礼拝を献げる毎にイエスによって贖われているという現実をしっかりと見つめなければいけません。 (写者は晩年の先生から重ね重ねこのことを教えられました)

主の贖いの業なしにはこの礼拝はないことを、いつもはっきりと覚えなければなりません。教会の礼拝が今は色々な意味で制約があり、限界がありますから、理想とする姿に礼拝はなかなか調えられませんが、主の贖いによってこの恵みの時が与えられ、赦しが与えられていることを明確に覚えるために、教会は聖餐式という sacrament をもっています。

しかしながら、どんなに立派な献げ物をして、犠牲を献げようとしても、「礼拝するものの良心、即ち神の御前における私たちの心を神の御心に適ったものに変えること、石の心が砕かれて柔らかい肉の心に変えられることは、私たち自身の励行や努力では絶対にできない業なのです」と書いてあるのです。(悔い改めの大切さを常に強く訴えられました)

第⑩節、

⑩これらは、ただ食べ物や飲み物や種々の洗い清めに関するもので、改革の時まで課せられている肉の規定にすぎません。

あなたがたは、地上に生きているという限定付きの中で、ああしなさい、こうしなさいと命じられているに過ぎないのです。そして、そのことをしたから言って清められるわけではないのです。それは、神と出会うために何をしなければならぬかということ「象徴的に表している行為」にしか過ぎない。

つまり、地上に生きているものの血は自分を清める力を持っていないから、イエスの御血を振りかけていただいて、清められていく以外に、神の御前に相応しい者に変えられてはいかない。そのことがここでは明確に書かれています。

旧約の時代に持たれていた礼拝は、安息日の礼拝であれ、あるいは贖罪日の儀式であれ、そういうものによっては神の御前に立てないまでに自らが穢れ果ててしまっているのです。そうした現実の中にある地上の幕屋の限界をこの⑩節までに語っています。

第⑪節から今度は少し話題を変えて「大祭司イエス・キリストによって与えられた贖いとは何か、その中における聖所とは、礼拝とは何か」ということを語ってゆきます。

この第⑪節からは「昔の事柄」とは違って「今の事柄」になるわけです。

ここで中心的に語られているのは、イエスが恵みの大祭司として完全な幕屋を通して(即ち、地上の肉体をまとわれて)私たちのところにおいでくださり、御自身の御血によって、ただ一度だけ永遠の贖いを成し遂げてくださった、そのイエスの御血によって、心の

底から新たにされ、生ける神イエス・キリストを礼拝する恵みに召され、主の教会に招かれているということを語っているのです。

私たち自身では不可能だったので、イエスは深く憐れんでくださり、神と出会う道を開いてくださいました。それが「イエスが大祭司である」ことの意味なのです、ともう一度著者は語るのです。(完全な幕屋は手で造った幕屋ではない、神御自身をご用意してくださった幕屋、教会、あるいはキリスト御自身の御身体と言っている人もいますけれども)、更には天にある幕屋の雛形と考えても良いと思います。

「この⑩節から⑭節までのところは大変面白い対比をしています」。

9章の①節②節のところ幕屋はこのようにできていますと書かれていますが、⑩節の方では人間の手で造られたのではない、「即ち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り」と書かれています。

あなたがたは神から与えられた律法に従って幕屋を造ったが、イエスは既に神によって造られた幕屋(即ち、今、雛形として見ている地上の幕屋とは違い、)天にある幕屋から来られたのです、だから、あちらが完全であって、人の手で造ったこちらの幕屋は不完全なのです、という完全性と不完全性ということで9章の①節から⑨節までと⑩節から⑭節までとを付き合わせてみると面白いと思います。

⑥節後半から⑦節

祭司たちは礼拝を行うために、いつも第一の幕屋に入ります。しかし第二の幕屋には年に一度、大祭司だけが入ります。

と書いてあるのですが、それに対して、次のところでは、

第⑩節、⑫節前半、

けれども、キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の御血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。

そうすると、「大祭司はいつでも自分自身を贖うために神の前に選ばれた形で毎年聖所に入る、しかも1回の贖いをするために3度至聖所に入らなければならないのに、イエスは1度だけしかお入りにならなかった。どうして、ただ1度だけかというとそれは完全だからなのです。

ではなぜ3度かというとそれは不完全だからなのだということで、『イエス・キリストによる贖いの完全さ』と、私たちが律法に縛られて生きている限り起こってくる『不完全さ』を表している」のです。もう一つは「自分の血」を流すことなしに「家畜の血」によって贖ったというように書かれています。¹⁴⁵

⑦節のところでは「自分自身のためと、民のためと、民の過失のために献げる血を必ず携えて行きます」

と書いてありますけれども、それに対して、

第⑫節後半、

永遠の贖いを成し遂げられたのです。

イエス御自身の御血によって贖いを完成した、借り物ではない、穢れたものではない、不完全な動物の血ではない、完全な神の子の罪なき血潮によって贖いをなしてくださった、だからイエスの贖いこそが完全なものなのだとおっしゃっているのです。

第⑬節、

なぜなら、もし、雄山羊と雄牛の血、また雌牛の灰が、汚れた者たちに振りかけられて、彼らを聖なる者とし、その身を清めるならば

ここでは「供え物と犠牲について」書かれています。供え物と犠牲とが献げられても、礼拝する者は心を完全な聖なるものにすることはできませんでした。

「イエスは御自分が罪なき者でありながら、罪ある者の罪を全て被られた罪みれの者として神の御前に贖いの業を完成なされた」と、この聖書は私たちに語るのです。¹⁴⁵

第⑭節、

まして、永遠の"霊"によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、私たちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。

こうした対比がこの⑪節から⑭節まで書かれているわけです。

古い制度によって神と民との間に結ばれた約束は、今やキリストによって完全な形で与え直されたとするならば不完全な形のものに縛られている必要はない。

「もはや私たちは自由なキリストの恵みの中に生かされることによって、神と自由に出会おうではないか」という呼びかけがここではなされているのだと思うのです。

第⑮節から⑱節、

こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者なのです。それは、最初の契約の下で冒された罪の贖いとして、キリストが死んでくださったので、そのキリストに各々召された者たちが、既に約束されている永遠の財産を受け継ぐためにほかなりません。遺言の場合には、遺言者が死んだという証明が必要です。遺言は人が死んで初めて有効になるのであって、遺言者が生きている間は効力がありません。だから、最初の不完全な契約さえも、血が流されずに成立したのではなかったのです。

ここから後の部分は、私たちの信仰の基本にいつもあることですから、余りくどくどと

申し上げないことにしようと思いますが、ただここで「遺言」という言葉が出て来ます。「遺言という単語」は、実は「規定とか掟とか契約とかという単語と全く同じ語幹からなる単語なのです」

その単語を上手に読み替えながら、この著者は「あなたがたが神からいただいた契約、即ちイエス・キリストによって与えられた遺言はイエスの十字架の死によって効力を発したのです。『イエスが十字架上で死んでくださらなければ、新しい契約は意味のないものだったのです』という言い方をします。これは新約聖書の中でも大変珍しい扱われ方です」

突如としてここに「遺言」という言葉が出て来るので、何でだろうと思われる方が沢山いらっしゃると思いますが言葉自体は契約と同じなのです。全く同じ言葉がもっている意味の中で遺言という意味の言葉を引き出して、だからこそイエスは十字架でお亡くなりになる必要があったのだ、御自分が命を捨てられることによって神との間に交わされた契約なる遺言状は効力を発し、そのことのゆえに、「私どもは神の民となった、贖われた、罪なき者とされた、神の御前に立てる者とされた」ということを語っているのです。「そういうイエスの贖いの完全さというものを幕屋の形とか礼拝の形とか色々なことを述べながら、最後に遺言というものまで持って来て「イエスの贖いは完全だった、それゆえに彼はメルキゼデク系の大祭司なのだ」と述べているのです。

しかも「神の御子イエスは一度十字架にお架かりになった以上もはや大贖罪日に毎年至聖所に入られる必要はない。その一回限りで永遠に有効であり、永遠に完全であり、永遠に確実なのだ」、そういう意味で今度は『永遠』ということの問題にしてゆくわけです。

時によって、条件によって移り変わるものではなく、決して変わらない恵みとして、もはや何人によっても書き換られない遺言ゆえに、お書きになった通りに執行されなければならない御業としてイエスは贖いを完成してくださった。そういう言い方をして、「キリスト・イエスの贖いの完全さ」をここでは述べているのです」

(贖いの三つの特色)

その贖いの完全さをここで考えていこうとする時に、「贖い」という言葉がもっている3つの特色をしっかり捉えておかなければなりません。

その一つは、一番単純な方法で「買い戻す」です。奴隷として売られたものを値を払って買い戻してゆく、自分のものにする。ですから罪の奴隷になっていた私たちを神はイエスの御血という尊い代償を払って買い戻してくださった。その場合「奴隷の立場そのものは変わらず、所有者が変わっただけです。そしてその支配権によって、その奴隷をどう扱うかは新しい所有者によって決まる。ですから、私たちは憐れみ深い神の恵みの中に支配される奴隷となった。奴隷でなくなったわけではないのです。買い戻されたという段階です。」¹⁴⁸

第二の段階は「身代金を払うということです」。

ある国で身代金を払うのが嫌だからということで、身代金を払えと言った人を皆殺しにして人質を助けたという事件がありましたが、実際は身代金は払われていたのです。身代金なしにゲリラから民衆を守ったことがニュースで報じられ、後に、皆すごい身代金を払ったという事実が判明し一時、90%近い支持を得た大統領支持率が、最近また50%台に下ったようですが、代償なしには私たちは何物も得ることはできないのです。ですから私たち自身が本当に支払われなければならないものが、支払われていないとするならば、誰かがそれを支払ってくださったということなのです。そしてそのようにして身代金が支払って頂いた結果私たちは奴隷の労役、苦悩から解放されることができたのです。それが贖いの二番目の意味です。

「罪の中で目的なく働く無益な労働から私たちは解放された。感謝と恵みをもって仕える命に置き換えられた。それが神が身代金をもって買い取ってくださったという意味です」しかも、上記二つは「宗教という枠組みを超えた人類の贖い」という意味なのです。

三番目は、今度は色々な訳し方がありますが、「拭き消す、ぬぐい去る」という意味があります。「私たちに染みついている罪をキリスト御自身が拭き消してくださる、ぬぐい去ってくださる、洗い清めてくださる、だからもはや私たちは穢れた者ではなくなった。それが『贖い』という言葉のもっているもう一つの意味です」

これら三つが聖書のもっている「贖い」です。イエス・キリストの御血、私たちの一切の罪から赦しとか清めてくださるという言葉のもっている意味は、正にその意味なのです。そういう「贖い」が大祭司キリストによって完全に行われた結果、もはや人間の大祭司が繰り返し「贖い」の罪祭をする必要は完全になくなったのです。

第⑩節から⑫節

⑩というのは、モーセが律法に従ってすべての掟を民全体に告げたとき、水や緋色の羊毛やヒソプと共に若い雄牛と雄山羊の血を取って、契約の書自体と民全体とに振りかけ、

⑪「これは、神があなたがたに対して定められた契約の血である」と言ったからです。

⑫また彼は、幕屋と礼拝のために用いるあらゆる器具にも同様に血を振りかけました。

⑬こうして、ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められており、

血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです。というのは、モーセが律法に従ってすべての掟を民全体に告げたとき、水や緋色の羊毛やヒソプと共に若い雄牛と雄山羊の血を取って、契約の書自体と民全体とに振りかけ、「これは、神があなたがたに対して定められた契約の血である」と言ったからです。また彼は、幕屋と礼拝のために用いるあらゆる器具にも、同様に血を振りかけました。こうして、ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められており、血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです」

あの贖罪日、即ち「イエスのカルバリの十字架の出来事の後、もはや二度とあの贖罪日を迎える必要はなくなった、神の贖罪は完全に成就された」ということを、ここでは宣言しているのです。そういう意味では、②③節に続き「罪を贖う唯一のいけにえ」は、そのところに結びついて、それでは、イエス・キリストの贖いの血潮とは一体何だろうかということ、もう少し丁寧に説明しているのだと思うわけです。

これは10章に向けて「旧約と新約、（古い契約と新しい契約）との間にある大きな違いは何なのか」につながります。

それは、人間の手で作った雛形というこの世的な古いものではなく、天にある幕屋を突き破って降下して通いらっしゃったイエス・キリストによる新しい天の支配が、この歴史の中に突き刺さっているのがこの現代なのだという捉え方なのです。

「しかしなお、私たちはこの地上に生きている限り古い幕屋の中に生き、古い思いの中に閉じこめられているようであるけれども、その古さの中で滅びることなく、キリストの贖いの血潮のゆえに全く新しく買い取られた者としての歩みを始めている。だからこそその贖ってくださった御方の大きな恵みの中で、豊かに生きて行こうではないか。価値なき者どもに身を託すのではなく、喜びの業に、主を讃美する業に、神に仕える業に、そして神の御業を具体的に進めるために神が愛していらっしゃるすべてのものを担って、共に歩んでゆく歩を進めていこうではありませんか」というお勧めがこの9章の前半のところから呼びかけられているのだらうと思います。（1997年5月10日）

写者・あとがき

松山幸生先生の懇切丁寧な説き明かしによって、旧約時代の礼拝が手に取るように目に写ります。著者が何度も「最初の契約」について言及するその意義は、新しい契約の鮮明さを浮き彫りにして、ヘブライ人へ訴えなければならなかった当時の時代背景があったのだと思います。

⑨節「この幕屋とは、今という時代の比喩です。」の「今」はこの手紙が書かれた当時の今を超えて、私たちの今、即ち、罪が増し加わった「今という罪の時代」に寸分違わずに当てはまると感じました。

古い律法によって定められた礼拝の形では「礼拝する者の良心を完全なものにすることができない」（⑨節）

しかし、「永遠の”霊”によって御自信をきずのないものとして神に捧げられたキリストの血は、私たちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか」著者は「させるに違いない」と言いたいのでしろうし、言っているのです。

確信を持って⑮節「キリストは新しい契約の仲介者なのです」と宣言しています。

主イエス・キリストの「受肉・十字架の出来事・復活」によってもたらされる新しい救い「インマヌエル」の確信の信仰は今の私にも迫ってきております。

信仰ジュニアとして歩みながらその足跡を確実にしたい、できることならより深めたいとの願いを込めてこの写業を努めております。

今回も森容子先生には沢山の知識と知恵をご援助いただき、聖書独特の言葉遣いと神への畏敬と尊厳を丁寧な表現にしてくださったり、主語を明確にして頂いたり、松山幸生先生の趣旨を損なわない文章の置き換えをしてくださいました。

話し言葉を書き言葉にすることには細心の注意が必要です。書かれた日から流れた時代の中で生じた出来事や、風化した出来事、キリスト者の中でも生活の変化に従って、信仰における考え方、礼拝形態や、常識にの変化が生じていることは無視できません。しかしながら、普遍的な真理は変わりません。松山幸生先生の教えを直接受けられた森容子先生ならではの推敲をいただくことによって道が整えられておりますこと感謝でございます。

半分の道のりを歩んで参りました。健康を支えられて完遂できるように祈っております。

2022年11月30日